

十迄のもの……………一人  
 十以上二十以下のもの……………二人  
 二十以上三十以下のもの……………四人  
 三十以上四十以下のもの……………一人  
 四十以上五十以下のもの……………一人  
 五十以上九十以下のもの……………二人  
 百迄のもの……………二人

その百まで數へたものにそれから如何に數へるか  
 とさいて見たら、一人は百一二と數へますとい  
 つたが、一人は、また一二と數へますといつた。

### 人生の七時期

樂 天 子



凡べて世界は舞臺にて、あらゆる男女は俳優なり、  
 彼等は皆其の出口及び入口を有せり、一個の男子  
 はその時に從ひて其の役を演ず、其の幕七段あり、  
 第一段に於ては乳母の腕に泣き絶がり、或は乳を  
 吐きもどす嬰兒となり、次には輝ける朝の顔色に  
 小草提を持ちて、蛇の如く好もしげもなくうねり  
 行く口さわがしき學校の生徒となり、其の次には  
 情婦の眉根に溝えたる怜れなる歌曲を以て爐火の  
 ごとく焦思せる情郎となり、次であやしき誓ひを  
 喜び豹のごとき鬚を蓄ひ功名を貪りて之に熱し、  
 忽ち怒り忽ち争ひ、炮口に臨むとも尙ほ且つ水泡  
 のごとき譽れを求むる兵士となり、更に續きては、  
 良き俚諺を多く辨へ、處世の方法と交際の道とを

心得、切り付けの髻を捻りて正道を行なひ得々としてその興へられたる任務を果す、第六時期に至りては、鎗眼として滑稽演技者の如く鼻端に眼鏡をかけ小脇に財囊を携へ、能く保存せられたる壯時の袴は、今や瘦脛に廣過ぎたる廣き世界となり、男らしき襟は變じて子供の高調子に返り、話響の間に吹鳴す此の面白き人の歴史を終はる最後の役割は第二の子供時代にして、齒なく、目なく、味なく、各々の物なき單一なるものとなるなり。

世はをしなべて  
あらくゆる人は  
往くもかへるも  
みなそれ／＼に  
な、つのやくを  
うばのかひな  
あさなく／＼に  
をしへの庭の  
はなぞ穗に出て  
わぎものかどへ  
ひらめきわたる

舞臺なり、  
役者なり  
とゝまるも  
ところえて  
つとめゆく  
なけるちぢ  
うねりゆく  
てならひ子  
戀のみち  
こがれゆく  
つるぎをも

踏みくだかんと  
誓ふなる  
年のなべ  
世のよしあしを  
たちつぬつ  
かいの身に  
見るからくしき  
うらさびて  
ほをりゆく  
もとのちのみに  
もののおやめも  
わかす消えゆく  
是れ人生の七時期と題せる彼の有名なる「シエ！  
クスビヤ」の詩篇なり、全篇を通じて、熟讀玩  
味すれば首尾相照應じて、昆々たる興味の湧出す  
るものあるを見るべし。

むくつけき  
やがてたけゆく  
ゆたかさよ  
くみわけて  
ゆきたけるむ  
くつろぎて  
風情なり  
しのび／＼に  
身の終り  
かへりきて  
ぬばたまの  
わかれゆく